総合討議の総括

統一テーマ「ロマンス諸語における社会言語学」

長谷川 信弥（とりまとめ）

1 はじめに

日本ロマンス語学会第 59 回の統一テーマは「ロマンス諸語のおける社会言語学」であった。コロナ禍のなか、大会は当初予定の明治学院大学での開催が見送られ、zoom 利用の全面オンライン形式で 2021 年 5 月 15 日(土)および 16 日(日)におこなわれた。参加者は 70 名弱であった。統一テーマ 7 件、自由テーマ 9 件の発表がおこなわれたが、ここでは、統一テーマの発表（持ち時間 20 分）および総合討議でのディスカッションをふりかえる。発表者の敬称は略す。総合討議はすべての発表のあとでおこなわれたが、ここでは各発表の要旨のあとに質疑応答もふくめた討議の内容を記載する。

また、以下の発表のうち、糸魚川、塚原、竹内、佐野の発表は、論文として本号に掲載されている。

2 研究発表と総合討議

(1) 糸魚川美樹「「包括的言語使用」をめぐる議論－スペイン語を例に」

1980 年代から議論のある、「包括的言語使用」(lenguaje inclusivo)に関わるジェンダーに関する言語の平等を求める運動をメディアの動きを確認し、とくにスペイン語における名詞の男性(形)の総称用法のとらえ方に関する議論を紹介し分析している。なかでも、従来のガイドラインを批判した 2012 年のいわゆるボスケ報告以降の社会的なできごとを検証し、社会言語学としての課題を提起した。

[総合討議]

英語でおこなわれている代名詞のような議論はあるかとの質問に対して、スペイン語ではまだ議論が深まっていないようだとの回答があった。検定試験での使用状況に関する質問に対してはまだ確認できていない、また、RAE(スペイン王立学士院)のいう「言語の権利」とはどういう意味かとの質問に対しては、擬人化された「言語が持つ権利」との意味ではないかと回答があった。さらに、@の発音に関する質問があった。

(2) 塚原信行「1980 年代初頭のカタルーニャ自治州におけるカタルーニャ語知識の伸長」

1980 年代のカタルーニャで実施された言語調査のデータをもとに、カタルーニャ語を理解する人口の割合が 1981 年から 1986 年の 5 年間で 10 ポイント以上の上昇を見せたことの社会言語学的含意はなにかを考察したもので、言語政策的含意としては学習機会の増加および社会的プレゼンスの増大が言語能力に関する自己認識の変化を生んだことが指摘できるとした。

[総合討議]

早い時期の政策サイクルの確立の時代についての質問があり、発表者からは、推測として母語話者の言語意識の変容が起こったためではないか、それを確認するためにはさらなる調査が必要である、との回答があった。また、80 年代前半の話者の急増が質問方法に起因する可能性があるのではないかと指摘があった。これに対し発表者は、精査が必要であるが、質問方法は以降も変化していない、また近年では四技能だけでなく、使用調査もおこなっており、使用実態も明らかになってきているとの回答があった。

(3) 竹内めい「フランコ独裁期のスペインのカタルーニャでの初等教育における言語（使用）についてのかたり」

フランコ独裁期（1939-1975）のスペインのカタルーニャでの初等教育について、当時の児童と教員へのインタビューを実施し、そのなかで学校生活での言語使用について語られた内容に着目し、当時の教育現場での言語使用について報告した。結論として、公的には排除されていたカタルーニャ語が家庭内や実際の学校生活のなかでは排除されていなかったことが確認できたとした。

[総合討議]

フランコ期の言語名の呼び方についての質問があったが、カタルーニャ語の呼び方はインタビュー内では聞かれなかったと回答があった。インタビューの答えに現在のバイアスがかかっていなかったか、またカスティリア語母語話者へのインタビューをおこなっていないかなどの質問があった。

(4) 三島庸平「基層言語、傍層言語、上層言語の概念と基層理論の適用条件」

ロマンス語言語学の観点から基層言語、傍層言語、上層言語の概念を確認し、ある言語をこれらの点から分類する際には、言語の社会的優位性を重視すべきで、これにより例外事例を一般的枠組みに収める、概念の一貫性が高まる、この分類法の汎用性が高まることが期待できるとした。また、基層理論を適用する際の条件として、問題とされる言語変化が特定の基層言語地域外に生じている場合、そのロマンス語も分析の対象とすべきと主張した。

[総合討議]

基層語理論の適用条件のさらに詳しい説明をしてほしかった、また、印欧語以前の言語としての地中海全体の基層語を想定してはどうかとのコメントがあった。これに対し、イベリア語の基層語としての影響は少なかったのではないかとの回答があった。

(5) 寺尾智史「ヨーロッパ文学の中でのロマンス諸語言語多様性の語られ方」

文学史におけるロマンス諸語の言語的多様性表象の変遷を 4 つの類型に分け、文学史上の作家の言語多様性認識の位相を論じた。類型 I では、田舎言語を踏み台にして国家的言語を際立たせるケース、類型 II で

は、規範言語の体制を整えるために諸方言を同化させるケース、類型 III では、同じ国家に同居する周縁言語に規範言語を飾り立てる存在とするケース、類型 IV では、規範言語と並立可能な存在として、その独自性を示唆するケースとして分析した。また、日本語の方言についても言及があった。

[総合討議]

発表要旨に記載があったものの、発表では発言のなかったことについての説明を求める依頼があり、発表者からオルフェウス変容についての説明があった。また、ドンキホーテにおけるバスク語に関する表現についての質問があり、自分たちの言葉とは異なる言語として評価をしているのではないかとの回答があった。

(6) 佐野直子「フランス語圏における「パトワ」概念の広がりと断絶：北カタルーニャにおける patois 概念の受容拒否」

フランス語圏における patois 概念の歴史的・地理的拡散過程を確認し、なかでも北カタルーニャ(ピレネー・オリエンタル県)カタルーニャ語圏のカタルーニャ語名称問題と patois 拒否の概念の変遷を論じた。langue / patois / dialectes の名称選択の歴史的適用を論じ、カタルーニャ語話者側の langue 意識の拡張課程を確認し、patois 概念使用の忌避の経緯を、北カタルーニャだけでなく、スペイン側の辞書の記載も確認し、patois 概念の需要拒否を分析した。

[総合討議]

パトワの概念がロマンス語に対してどれくらい広がっているのか、との参加者への質問が発表者からあった。これに対して参加者から、カタルーニャではこの用語は使用されていないが、アラゴン語では以前よりパトゥエスという用語が使われている、などの回答があった。また、19 世紀のカタルーニャ語の文献に関するコメントがあった。

(7) 山本真司 「フリウリ語の使用の歴史について」

近年の日本の諸著作においては、フリウリ語の記述が増えているものの、誤解に基づく間違った記述が見られ、それらについて検討した。それらは、フリウリ語の社会状況の変化、イタリア共和国における法制度の変化などについての情報の不足、および文化的伝統や歴史的常識に関する理解の欠如が起因すると思われる誤解による記述が多い。例として、パゾリーニのフリウリ語についての記述を取りあげ、これ以前にも書き言葉があり、パゾリーニの使った言葉とは異なるといえ、よって同著者をフリウリ語の創始者であるとみなすことはあてはまらないが、このような情報によって、より正確な記述が望まれることを主張した。

[総合討議]

フリウリ語において、公証人の書いた土地の契約書などの文書が現存しているかとの質問があり、現存

しており、校訂本も出版されているとの回答があった。

3 まとめ

今回のテーマである社会言語学をロマンス語での研究対象としている発表者のなかでは、カタルーニャ語に関するものが多いことはよく知られていることで、それに沿うように同言語に関する発表が多く、活発な議論がおこなわれた。また、スペイン語における包括的言語使用の問題は、ロマンス語全体に関わる問題であり、今後、各言語での議論の紹介が期待されるところである。